

やくそく

こかせさちさく
くろいけんえ

ある おおきな 木に、
いっぴきの あおむしが いました。
あおむしは、まいにち
木のはを たべて、
からだ が ちょうに かわる
ひを まって いました。

ある とき、いつものように
はを たべて いると、どこからか、
むしゃむしゃ むしゃむしゃと、
おとが きこえます。
なんと、じぶんと そっくりな あおむしが、
おなじ 木で、はを たべて います。
「だめ だめ。この 木は、ぼくの 木。
ぼくの はっぱ。」

あおむしが いうと、
その あおむしも、いいました。
「この 木は、わたしの 木。
だから、はっぱも、わたしの はっぱ。」

にひきが いいあいを して いると、
どこからか、もりもり もりもりと、
おとが きこえます。
なんと、じぶんたちと そっくりな あおむしが、
おなじ 木で、はを たべて います。

「その はっぱは、ぼくのだぞ。」
と、いっぴきめが いいました。
「わたしの はっぱを たべないで。」
と、にひきめも いいました。すると、
「そんな こと、しる ものか。」
さんびきめが いいかえました。
あおむしたちは おおげんか。
その ときです。

「うるさいぞ。」

おおきな 木が、ぐらりと ゆれて いいました。



「みんな、もっと うえまでの のぼって、
そとの せかいを みて ごらん。」
あおむしたちは、いわれた とおりに、
のぼって いきました。
いちばん たかい えだに つくと、
さんびきは、めを まるく しました。
この おおきな 木は、はやしの なかの
たった いっぽんだったのです。
「ぼくら、こんなに ひろい ところに
いたんだね。」

「そろも、こんなに ひろいんだね。」
とおくには、うみが みえます。
あおむしたちは、まだ うみを
しりません。
「あの ひかっている ところは、
なんだろう。」
さんびきは、えだに ならぶと、
せのびを しました。
「きれいだね。」

からだ が ちょうに かわったら、
あそこまで とんで みたいな。」
「わたしも、あそこまで
とんで みたい。」
「それなら、みんなで いこう。」
さんびきの あおむしは、
やくそくを しました。
そして、くんねり くんねり
おりて いきました。
木のはが、
さらさら そよいで います。

